

## 菊子の作品に垣間見る宗教観

## ―「他力信心の女」「念仏の家」より

水野 真理子

はじめに

菊子（一八七九―一九五七）は、大正の三閨秀の一人と呼ばれる。富山出身の実力ある女流作家である。彼女は『青鞥』の時から参加し、積極的に寄稿し、「新しい女」たちの一人であると言えよう。そして、彼女の作家への道は、自力で切り開かばならない険しいものであり、相当の努力で手にした成功だった。

暗的にその道を辿ってみよう。尾島菊子としての子供時代、の実権を握っていたのは浄土真宗に熱心で頑迷な祖母である富山藩の氏族の娘で遊芸に関心の高い家庭に育った菊子の祖母との間には争いが絶えず、陰鬱な中で過ごす少女時代だった。祖母からもたらされた縁談から逃れるべく、また女学進学したいとの夢の実現のために、母方の従妹で十二歳年上弁ふさ夫妻を頼って上京する。教師の経験も持ち、文学好き詩や和歌もたしなむ彼女から、文学的影響を受けたものの、りされている菊子の学費まで、生活費に消えた。父の死去に、手資を工面できなくなった菊子は、女学校を中退する。また、に年下の愛人が出来、夫婦の生活が終わったために、菊子も家を出、自活の生活が始まった。会社の事務員や蔵前的高等（現東京工業大学）のタイピストなどの職業につきながら、から母と弟妹を呼び寄せて、東京で生活する。さらには、三

島霜川の紹介で、徳田秋声のもとへ弟子入りし、本格的に女流作家への道を目指していった。『少女界』『婦人界』などの雑誌に、数々の少女小説を発表、そして、一九一一年、大阪朝日新聞の懸賞小説に応募した「父の罪」が二等となり、三月からは同誌に連載され、作家としての尾島菊子の名が、文壇で注目され始めた。家族を養うためもあり、菊子は、当時の女性作家としては珍しい職業作家でもあった。彼女の女性としての自立心は、苦勞を伴った作家活動に顕著に見られる。こうした、自立、独立的な生き方が、彼女の宗教に対する考えにも表れている。本小論では、「他力信心の女」と「念仏の家」をてがかりに、宗教、特に富山で盛んであった浄土真宗に対する彼女の批判精神、そして菊子の自立、独立的な観念を探ってみたいと思う。

## 二、「他力信心の女」掲載の経緯

菊子は翁久允主宰の郷土研究雑誌『高志人』に「他力信心の女」を二巻二号（一九三七年二月）から三巻四号（一九三八年四月）まで全十回連載している。菊子と久允は、久允が東京朝日大朝出版編集部長として『週刊朝日』の編集を担当していた頃の一九三七年に知り合ったらしい。久允は在米時代から、女流作家菊子三名は耳にしており、また同じ郷土の作家として注目していた。アメリカで、自由平等の精神、また日本よりも進む男女平等の状況などを体感してきた経験から、彼は日本に戻って、依然として、女性たちが男性に経済的に依存し、家庭に留まらざるを得ない状況に甘んじていることに違和感を覚えていた。さらには、男性作家たちが、書物や話の中では女性の独立などを声高に訴えていても、実際には依然として女性に対する蔑視的な見方は変わっていないことに気づいていた。そうした状況において、久允は自立

や地位の向上を願う女性作家たちを激励したいと思い、『週刊朝日』において新進女流作家の特集を組み、また女流作家たちとの交流会もたびたび持つて親交を深めた。女流作家たちは久允を慕って彼のもとを頻繁に訪ねたという。その中に菊子も含まれていた。ただ菊子については、もう既に作家として、『婦人画報』『婦人公論』『婦人サロン』『女人芸術』などの作品発表の場が数多くあり、新進作家というよりは、同郷の先輩女流作家という位置づけであったと思われる。菊子と久允の妻も懇意になり、よく久允宅で夕食を取るなど、家族ぐるみの交流が持たれた。また久允と菊子は、ともに小唄を習い、徳田秋声の「二日会」に参加するなど、文学的交流を続けていた。その延長線上で、久允は『高志人』への寄稿を菊子に依頼したようである。<sup>20</sup>

その経緯を伝える次のような資料がある。『高志人』二巻一号に、『高志人』創刊号を読んで」との題で、読者、関係者からの感想が載せてある。衆議院議員石坂豊一、詩人の中山輝も感想を寄せている。そこに小寺菊子からの感想もあり、次のように述べている。「高志人の発刊をお目出度存じます。それ〴〵に面白い記事が澤山ありました。少し堅すぎるやうに思ひますが。家庭人にも読ませるやうにも少し柔らかいものもあつてよいかと思ひます。富山を知るために伝説など結構です。」<sup>21</sup>と、全体的には興味深いと好評しているが、一方で、記事の堅さを難点とし、家庭を生活拠点とする人々にも共感を得られるやうな、取りつきやすい内容の作品も掲載されていると良いと述べている。

彼女の感想を受けてであろうか、久允は同号の「次号予告」欄で、菊子の連載を紹介し次のように述べている。

『創刊号』を出してから、経営の方針をきめるために二か月休んで、『新年号』を第二巻第一号として世におくつたが、

第二号以下は、毎月間違なく発行してゆきます。(中略)

そこで、余り固いものばかりでも、と思つて越中出身の女流作家小寺菊子を煩はして小説を連載することにしました。小寺女史は女流文壇の先駆的作家で、明治四十四年大阪朝日新聞長編懸賞小説に入選、『父の罪』は、当時洛陽の紙価を高からしめた。続いて同紙に長篇『頬紅』を、大阪新報に『愛情』を、福岡日々に『愛の影』、名古屋新聞に『あこがれの中に』等々の傑作を発表し、以来短篇小説百五十種を一流諸雑誌に発表した。越中人はどの方面に向かつてても苦勞したが、この女子などはこの方面での立志傳中の人物である。<sup>24</sup>

菊子の先の感想を踏まえたやうな、久允の書きぶりがあり、さらに彼女の小説家としての評価、郷土出身の女流作家の先駆けで、苦勞人である彼女の功績を記している。

続いて、内容については次のように述べている。

二月号から十回に亘つて連載される「他力信心の女」は富山を舞台として、滅びゆく旧家の崩壊と、絶対他力を信心する老婆の哀れなる生活を描いたもので、旧時代の富山の情緒が、手にとるやうに鮮かに描かれ、吾々越中人が走馬燈のやうにvarietyゆく世態の中に、ともすれば忘れゆかんとする過去情緒が、一種の魅力をもつて逼つて来るものである。<sup>25</sup>

失われゆく富山の家庭における人々の生活実態、そこに見られる精神、心情的なものが色濃く映し出された作品として、期待をかけて読者に紹介している。

### 三、「他力信心の女」における浄土信仰

「他力信心の女」は書き下ろしではなく、「哀しき祖母」(『報知新聞夕刊』一九二一年十月十四日・十二月五日連載)を改題した作品である。話の筋は、浄土真宗への信心の厚い祖母「おやへ」が、全く信仰心のない夫、そして息子夫婦に対して、不平不満を抱え煩悶しながら生活している。しかし、そうした業を乗り越え、何とか極楽浄土を達成するために、ひたすら念仏を唱える。その生活の中、夫に女性関係があることがわかり、その現場を突き止める、関係の終結をはかったが、それが契機となったのか、夫は日増しに衰え、遂には病で先立ってしまった。さらに息子は相場に手を出し、借金を作って姿をくらましてしまった。その借金の返済のために、家屋敷、そして家財道具一切を売り払い、一家は離散、没落という結末を辿った。嫁と孫たちは、東京の親類の元へ身を寄せるために、故郷を出、おやへは一人、菩提寺である念称寺に引き取られた。しかし、不注意で火を出してしまったことを契機に、寺では次第に疎ましく思われ、哀しい末路を辿っていくという作品である。

まず、なぜこの作品を「哀しき祖母」から「他力信心の女」に改題したのだろうか。第一に、『高志人』が郷土研究雑誌として、立山信仰他、宗教的なテーマを扱っていたことから、そうした雑誌の傾向に合わせたためだと考えられる。また、固いものではなく、家庭人にも読める作品が、『高志人』の中に寄稿された方がよいとの感想を菊子が抱いていたことから、富山における家庭での一場面を象徴的に表す題として、富山に根深い、絶対他力信心の浄土真宗を表現する題を選んだようである。この題の変更により、「哀しき祖母」という、祖母の哀れさという主題から、他力信心に没入する女という一般的な女性へと焦点が変わっている。

作品内には、祖母の心情を中心に、嫁姑の関係、祖父と祖母、また長男夫婦の関係、祖母と孫の関わり、また富山の片田舎に見られる典型的な家庭の様子、寺と人々との関係、信仰心など様々なテーマが散りばめられている。ただ、浄土真宗への信仰と祖母との関わりに着目すれば、そこには菊子の抱く、過度な信仰心に対する冷淡な視点が見られる。

まず、第一回で、菊子は祖母を次のように描写している。

早くから仏教だけがわりあひに開けてゐる、此富山といふ土地には、門徒の信者が非常に多いのだつた。その信徒たちは、年中お寺詣りを自分たちが此世に生きてゆく上に、最も大切な意義のある仕事として、争つて、自慢し合つて、街の寺々の説教を聴聞に歩き廻るのだつた。その中でも祖母のおやへは殊に熱心な――といふよりも、無信仰者からは常に「仏教氣ちがひ」と云はれてゐるほどの信徒なのである。

信者たちの信仰への熱の入れようを、菊子はいささか冷ややかに描写し、さらに祖母のおやへは、特別に熱心な、「氣ちがひ」と見えるほどの信者だと説明されている。

おやへが念仏を唱え、懸命に極楽浄土を願う姿は、お寺へのお参り、自宅の仏壇での読経、お寺への寄進などさまざまな形で描かれている。その信仰心の厚さは、当然、報われるべきものとの期待させる類のものである。したがって、物語の後半になり、行き場を失った祖母が、お寺に引き取られ、有難い念仏を毎日聞きながら、暮らすことができるという状況は、彼女のこれまでの信仰に見合ったものと思われる。しかし、おやへは次のような冷淡な言葉を、未亡人となっている寺の女主人に浴びせられるようになるのである。

「寺へなんぼ寄進がしてあつてもな、それは皆あんたの後生のためぢや、仏恩報謝のためぢやないかね。私どもはこの寺を守る身分ぢやさかいね。さうか云うて、あんたの世話をいつまでもしとる道理がありまさんのぢや。それに、こないして火事まで出されて見ると、第一檀家の衆につけても、あんたに居つて貰ふ訳にゆきまさんのぢや。」<sup>7</sup>

こうした無情な言葉に対して、弁解することもできない弱い立場の祖母は、朦朧とした頭の中にも、数十年間、貢いできた莫大な寄進の金額が浮かび、「あないにたんと寄進もしてあるのに、まだ足りんかいなあ、私としてはもう精一杯お寺様へ尽して来ましたがなあ、あゝあ、なんちう情けないこつてござりませうな。」<sup>8</sup>と、涙を流すしかなかった。

そして、小窓一つだけの暗い三畳の納戸に、蛆虫のようにひれ伏し、ただ阿弥陀如来のお迎えが来るのを待つて、衰退していく日々であった。ついに、おやへは、命を絶つことを考え、喘ぎながら、明朝、雪の降る中、井戸端に近づいていった。しかし、井戸の中を覗くと恐怖にかられ腰がすくむ。息絶え絶えのおやへのかすんだ瞳に映るのは、彼女の誇りとしてきた、我が家の立派な石塔であった。その白い御影石の石塔は、「かつて仏壇の帷の中かしみ〴〵拝んだ仏像のそれにもまして、神々しく懐かしいもの」<sup>9</sup>だった。おやへはその石塔にすがつて、夢うつつの中、最後を遂げていく。

おやへが、井戸端で見た石塔は、寺の石塔であったのかもしれないが、神々しい幻のように、彼女の誇りとしてきた我が家の立派な石塔として映った。ここで、おやへは、信心を捧げてきた金銀の仏像よりも、この石塔を彼女の心の最後の拠り所としている。

「祖父さまや、清吉や、憲坊や、早うお祖母をそこへよんでおくれや、『早う、如來さまにお縋りたいのぢや』」<sup>10</sup>と言う彼女にとつて、仏への信仰はすべて失われたわけではないが、石塔が仏像よりもまさるとの表現に象徴されるように、おやへの信仰には、極楽浄土へ向かうその最期になって、翳りが見えている。このように菊子は、厚い信仰心を持つて懸命に念仏を唱えてきたおやへが、決して報われずに終わっているという、悲痛な結末で、物語を終えている。

#### 四、「念仏の家」における浄土信仰

こうした「他力信心の女」にみられる信仰についての描写を考えるうえで、「念仏の家」を参考にしてみよう。「念仏の家」には、「他力信心の女」よりも、明確に浄土真宗の信仰についての批判意識が表れている。「念仏の女」は短編集『深夜の歌』(一九三六)<sup>11</sup>に収録され、菊子の身上をそのまま伝えているような自伝的な作品である。

富山県水橋にある本家「尾島家」に二十年振りに帰省した菊子とされる「私」。そこには家を切り盛りする「お文さん」と、病の床に伏す長男、三人の男児の孫たちが住んでいた。孫たちの母親は前年に病死している。お文さんと、家族、親せき、知人たちの近況を話し合う。その懐古的な話の中には、「私」の幼馴染であるいいいなづけでもあった「義雄」を含み、誰それが亡くなったという悲しい消息が多々あった。その談話中にお文さんは、仏壇で手を合わせて祈る。その光景について、「私」は次のような印象を抱いている。

お文さんは私が金ピカの袋に入れて持つて来た母の歯骨を

佛壇に飾つて拝んだ。聖武天皇時代既に越中文化の中心として佛教が開けてから、この国の人々の楽しみは、ひたすら他力信心に絶するよりほかないのだつた。その盲目的信仰によつて生まれたものは、かうなるのも前世の約束といふ宿命的『諦め主義』であつた<sup>12</sup>。

「私」とっては、人々を救うための信仰心が、人生の選択において、積極性を欠いた諦めの精神として捉えられている。

さらに、お文さんが、病で床に伏す彼女の長男に、「私」を会わせないことに対して、「私」は次のような疑問を抱く。

今の主人の兄もそれだつた、その妹もそれだつた、そして、その兄の娘もさうだつたし、まだ他にもその病気で斃れてゐる筈だつた。家が徒に広いばかりで陽が当たらない（中略）その陰鬱な薄暗い室々に、或は天井に、柱の木目に、額の裏に、先代が、その妹が、次々と残して行つたであらう数知れぬ黴菌が、如何にのんきに悠々といつても這ひ摺り廻り、家中で一番弱い人間の頭の上へと落ちてきたものではあるまいか？衛生知識の乏しい上に、仏教思想の影響で、早くも世の無常を観ずる習慣から、肺病といへば、あゝさうか、又か、倉も屋敷も持つてゆかれるぞ、今のうちに用心しようと、すぐに匙を投げ出して、いくら金があつても徹底的の療治をしてやらぬ習慣になつてゐる、病人こそ実に気の毒であるのだ<sup>13</sup>。

諦めてしまふ精神に発すると考えている。その落胆的、諦観の態度が、一家の没落につながつていくという哀れさを、菊子は「私」の思いを通して、批判的に描いている。

浄土真宗への行き過ぎた信仰が、諦め主義に映る菊子にとって、尾島家の仏壇はまた、幼少期の辛い陰鬱な記憶を呼び起こすものでもあつた。

佛壇にはいつまでも燈明がよろ／＼とゆらめいて、燃えのこつた沫香のかほりが廣い家ちうに漂つてゐる。佛を拝め、佛を拝め、と教へられた幼時が、ぞつとするほど思ひ出される。お文さんは話半ばにでもなんでも、とき／＼念佛をとへた。溜息を吐くやうな、あの淋しさうな念佛こそ、なんどわれ／＼の血氣に充ちた青春の覇氣を挫き、因循的なものにしたことか？私たちの幼時を脅かし、早くも厭世観念を吹き込んだのは、全くあの無常迅速おくれさき立つ世の習ひと、物悲しげに人間の生活を掻き口説いた、愚昧な年寄りたちのお念佛の声ではなかつたか<sup>14</sup>？

菊子にとっては、念仏は、寂しく、暗く、活氣に満ちた若者たちの、人生への希望を挫く、後退的な影響しか与えないものとして、手厳しく捉えられている。

## 五、おわりに

以上見てきたように、「他力信心の女」にも「念仏の家」にも、浄土真宗への盲目的信仰心に対する批判精神が表現されていた。こうした宗教観は、彼女が「新しい女」として自立、独立を目指して生きてきた、その来し方を象徴しているだろう。実態の見え



ない、真に効果があるのか定かでないものにすぎない女性の姿が、弱く、諦め主義に満ちた、自立とは程遠い人間の生き様に見えたのではないか。その点が、辛い少女時代の記憶を抱えながら、上京し、作家という夢を目指して、自力で道を切り開いてきた彼女にとっては、耐え難いものだったのだろう。「念仏の家」を念頭に置くと、「他力信心の女」に描かれる、哀れな道を辿るしかない、おやへの生き様への菊子の哀愁が、よく理解できる。

それにしても、郷土研究雑誌として、前提としては、故郷の風土、風物、信仰、言い伝えなどを肯定的に捉え、その由来などを掘り下げる、『高志人』の雑誌傾向にも関わらず、大胆にも、県民の多くが有難いものとして崇めている浄土真宗を取り上げ、そこにまつわる家庭内の悲劇的側面に目を向け、それに対する批判的な描写を行った「他力信心の女」を、『高志人』に寄稿するとは、思い切った試みではないだろうか。そうした態度にも、これまで培ってきた、菊子の作家としての自信と強さが窺える。

## 注

- 1 菊子の伝記的事項については、杉本邦子『小寺菊子―人と文学』（富山市教育委員会、一九八四）、金子幸代「富山の女性文学の先駆者・小寺（尾島）菊子研究2―人と作品」金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集3』（桂書房、二〇一四）、三〇六―三四五頁などを参照。
- 2 久允と菊子ら女性作家たちとの交流については、拙論「小寺菊子と翁久允―文学を通じた交流―『とやま文学』第三六号、二〇一八年三月発行予定、にまとめた。
- 3 『高志人』二巻一号、一九三七年一月一日、三七頁。
- 4 同上、九一頁。
- 5 同上。これらの資料については、公益財団法人翁久允財団代表理事須田満氏より、御教示頂いた。ここに感謝申し上げます。

6 小寺菊子「他力信心の女」（一）『高志人』二巻二号、一九三七年二月一日、七四頁。

7 小寺菊子「他力信心の女」（十）『高志人』三巻四号、一九三七年四月一日、三八頁。

8 同上。

9 同上、四三頁。

10 同上。

11 小寺菊子『深夜の歌』（教文社、一九三二）。本稿では『近代女性作家選集 小寺菊子「深夜の歌」』（ゆまに書房、二〇〇〇）の復刻版を使用した。

12 同上、三五〇頁。

13 同上、三五一―二頁。

14 同上、三六二頁。